

杉原一司全集のために

― 準備稿 (二) ―

キーワード…杉原一司、全集、未刊資料、既刊著作目録

『地域学論集』第一九卷第三号に、「杉原一司全集のために―準備稿―(一)」と題し、既刊の著作情報を整理した目録と、全集編纂準備のための連絡会の成果とを公表したが、その後、新たな既刊著作が発見されたため、補訂版の目録を次頁より掲載する。新たに追加した著作は、資料番号1・14・26・55・65である⁽¹⁾。また、資料番号41・42の掲載誌である『くれなゐ』には、第四卷四・五号以外の号にも一司の作品が掲載されている可能性があるが、公的機関における所蔵が確認できないため、個人的に所持されている方からの情報提供を切に願う次第である⁽²⁾。

文学者の全集を編纂することの意義は、そこに収められた既刊著作および未刊資料の往還的な読みを可能にすることで、一個人の文業の総体をおぼろげながらも浮かび上がらせ得るところにあるだろう。現在、一司の既刊著作は、初出書誌のほかには、竹内道夫編『覚書 杉原一司―「花軸」―「メトード」を中心に―』(富士書店 二〇〇〇年四月)、杉原一司歌集刊行会編『杉原一司歌集』(総合印刷出版 二〇二〇年三月)、蔵多優美編『メトード歌文集』(杉原一司歌集刊行会 二〇二〇年三月)によってその一部を読むことができるが、約五年にわたる文筆活動の中で、一司の思索や創作方法、生み出された表現がいかに変遷したかを本文に即してたどり直すことは難しい。

一方未刊資料については、一司の妻・杉原令子氏が書き残したメモによれば、一司自身の手で処分されたものも一定数あるようだが、御長男である杉原ほさき氏によって保管されているノートや手帳の内容を吟味し、既刊著作との関係を明らかにしつつ公刊することの研究上の意味は大きいと

* 岡村 知子・* 杉田 佳凜・* 田中仁

考える。本稿における田中仁の報告「杉原一司の手帳・ノート等未刊資料の年次(一)」は、未刊資料の中でも重要度の高いものと思われる『未定稿I』について、その成立過程・時期を、他資料との関係を精査しつつ考察したものである。こうした作業を積み重ねていくことで、作品論・作家論の土台となり得る全集の編纂を目指したいと考える。

(岡村知子)

【注】

(1) 塚本邦雄が「期待する作家 オレンジ」『短歌流域』第六号 一九四九年五月)と題し、一司の紹介文とともに引用した一司歌四首も見つけたが、一司の署名のもとに発表されたものでない場合は、目録には含めないこととした。

(2) 『くれなゐ』の所在に関して、手皮小四郎氏より、中嶋康博氏が開設されているサイト「田中克己文学館」(https://shiki.cogito.net/tanakakafana_kahm)についてお知らせいただいた。「田中克己著作目録」のページにて、田中克己の作品が掲載されている『くれなゐ』の内、第三九輯(第四卷第五号 一九四八年八月)、第五二号(一九五〇年九月)と六三号(一九五二年九月)の誌面がPDFで公開されている。

* 鳥取大学地域学部准教授

** 鳥取大学附属図書館職員

*** 鳥取大学名誉教授

杉原一司既刊著作目録(補訂版)

一九四四(昭和一九)年

1	(かげり来る)	やまと	大雅堂	一〇月一日	一卷四号	短歌三首。「作品二」欄。
	標題(一首目初句、一文目第一文節)	掲載書誌	発行元	発行日付	巻号	備考

一九四五(昭和二〇)年

2	(秋日中)	やまと	大雅堂	一月一日	二巻一号	短歌一首。
---	-------	-----	-----	------	------	-------

一九四六(昭和二一)年

3	(かつて我)	オレンヂ	臼井書房	一月一日	一卷一号	短歌五首。「同人作品1」欄。
4	(さからはず)	詩歌祭	詩歌研究会	一月一日	一号	短歌二首。
5	(かそかなる)	詩歌祭	詩歌研究会	一月一日	一号	短歌一首。
6	(毒茸を)	詩歌祭	詩歌研究会	一月一日	一号	俳句一句。
7	(少年の)	詩歌祭	詩歌研究会	一月三〇日	二号	短歌三首。
8	(菊百花)	詩歌祭	詩歌研究会	一月三〇日	二号	俳句二句。

一九四七(昭和二二)年

9	(薄いコツブの)	オレンヂ	臼井書房	一月一日	一卷二号	短歌三首。「同人作品」欄。
10	(沈黙の)	詩歌祭	詩歌研究会	一月一日	三号	短歌六首。
11	(憎しみの)	詩歌祭	詩歌研究会	一月三一日	四号	短歌四首。
12	裸形の文學―眞実と羞恥について―	詩歌祭	詩歌研究会	一月三一日	四号	評論。
13	(ふり上げて)	詩歌祭	詩歌研究会	二月二八日	五号	短歌三首。

3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4
世 代	エ ッ セ イ 的 傾 向 に つ い て	路 上	(倒 れ た る)	落 果 に つ い て	論 落	(向 つ 腹 を)	詩 歌 雑 談	思 ふ	「短 歌 の 宿 命」 に つ い て	歌 論 的 断 片	雑 歌	坂 口 安 吾 に つ い て 語 る 會	豚 と 陽 炎	岐 路 に 立 つ 定 型 詩	マ ノ ン の 恋	(硝 子 器 の)	編 輯 後 記
花 軸	花 軸	花 軸	オ レ ン ヂ	歌 集 落 果	圓 坐	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	花 軸	オ レ ン ヂ	詩 歌 祭
花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	白 井 書 房	刊 行 會 鳥 取 詩 歌 叢 書	圓 坐 荘	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	花 軸 社	白 井 書 房	詩 歌 研 究 會
一 〇 月 一 〇 日	一 〇 月 一 〇 日	一 〇 月 一 〇 日	一 〇 月 一 日	八 月 二 五 日	八 月 二 〇 日	七 月 一 〇 日	七 月 一 〇 日	七 月 一 〇 日	六 月 一 日	六 月 一 日	六 月 一 日	五 月 一 日	五 月 一 日	四 月 一 〇 日	四 月 一 〇 日	三 月 一 日	二 月 二 八 日
五 号 (一 〇 月 号)	五 号 (一 〇 月 号)	五 号 (一 〇 月 号)	二 卷 四 号		二 卷 八 号 (八 月 号)	一 卷 四 号 (七 月 号)	一 卷 四 号 (七 月 号)	一 卷 四 号 (七 月 号)	一 卷 三 号 (六 月 号)	一 卷 三 号 (六 月 号)	一 卷 三 号 (六 月 号)	一 卷 二 号 (五 月 号)	一 卷 二 号 (五 月 号)	一 卷 一 号 (四 月 号)	一 卷 一 号 (四 月 号)	二 卷 三 号	五 号
短 文。	短 文。	短 歌 四 首。	短 歌 四 首。「作 品 其 二」 欄。	あ と が ぎ。 掲 載 書 著 者 ： 中 林 則 男。	短 歌 五 首。 タ イ ト ル は 「 淪 落 」 の 誤 り か。	短 文。「P r o m e n a d e ・ 2」 欄。	対 談。 参 加 者 ： 小 谷 敵 ・ 杉 原 一 司。	短 歌 三 首。	評 論。	評 論。	短 歌 一 〇 首。	座 談 會。 参 加 者 ： 尾 崎 不 忘 (司 會) ・ 小 谷 五 郎 ・ 岩 村 泰 治 ・ 杉 原 一 司 ・ 坂 本 好 秋 (速 記)。	短 歌 五 首。	評 論。「特 集 第 二 藝 術 の 問 題」。	短 歌 六 首。	短 歌 六 首。「作 品 三」 欄。	「杉 原」 と 署 名 あ り。

4 5	4 4	(卵黄に)	抒情性の支柱―現代短歌批判―	風物	オレンヂ	風物社	オレンヂ社	三月一日	一月一日	六輯	三巻一号	短歌二首。	評論。										
4 3	4 2	4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	一九四九(昭和二四)年	一九四八(昭和二三)年										
二十代の角度	アクロバット論	戦後歌壇の悲劇	(殉難の)	(底深い)	(私も)	批評	(現今の)	暗夜篇	(いづことも)	陶酔の韻律	みづからの鞭―二十代の角度―	落穂	くれなゐ	くれなゐ	オレンヂ	新聲	花軸	花軸	花軸	花軸	新聲	花軸	オレンヂ
島谷好松			オレンヂ社	新聲発行所	花軸社	花軸社	花軸社	花軸社	新聲発行所	花軸社	白井書房	八月一七日	八月一日	六月一日	八月一日	四月一日	三月二〇日	二月二〇日	二月二〇日	二月二〇日	二月一日	一月二〇日	一月一日
一号	四巻五号	四巻四号	二巻六号		八号	七号	七号	七号		六号	二巻五号	評論。資料番号32の抄録。	評論。	評論。「歌壇時評」欄。	短歌五首。「作品 其二」欄。	月一日)。「発行」欄。「四月一日発行」「四月号」と記されたものと、「五月一日発行」「五月号」と記されたものの二種類がある(同一誌面であり、ともに奥付の発行日は四月一日)。	短文。「Promenade」欄。	短文。	短文。「Promenade」欄。	短歌一五首。	「短歌五首。目次に「杉原一汀」、「短歌」欄に「松原一汀」とある。	評論。	評論。

		一九五〇（昭和二五）年													
61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
第三の世界	失意の歌	砂丘	(新歌人集團の)	(2)循環	内部について	(獸肉を)	ごくそばくでおぼえがき	戯作	(2)速度	感傷排除の態度	商談	風景	方法の位置……やさしい短歌論……	指手	座談会 三十世代の短歌観
メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	情脈叢書第十七篇 歌集 海嘯	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	メトード	風物
メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	国坐社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	メトード社	風物社
一月一日	一月一日	一月二五日	一月一日	一月一日	一月一日	一月二〇日	一月一日	一月一日	九月一日	九月一日	九月一日	九月一日	八月一日	八月一日	三月一日
二巻一号	二巻一号	一巻五号	一巻四号	一巻四号	一巻四号		一巻三号	一巻三号	一巻二号	一巻二号	一巻二号	一巻二号	一巻一号	一巻一号	六輯
評論。「特集 世紀のなかば」。	短歌三首。	随筆。	コラム。「視覚」欄。	短文。「フオワイエ」欄。	短歌七首。	短歌四首。枝野登代秋編。	覚え書き。	短歌三首。	短文。「フオワイエ」欄。	評論。	短歌二首。署名は「早川則之」。	短歌一首。	評論。	短歌四首。	座談会。参加者：浅井好四郎・和田周三・下條義雄・杉原一司・福井秋良・頼田島一二郎(司会)。

67	あくびする花	現代短歌大系 第一巻	三一書房	六月三〇日		短歌六〇首。掲載書編者：大岡信・塚本邦雄・中井英夫。
一九七三（昭和四八）年						
66	初等文法	短歌	角川書店	八月一日	八月号	短歌六〇首。特集「戦後新鋭百人集」へ「篇」顔写真、略歴を付す。
一九五六（昭和三一）年						
65	（鉛錘の）	日本短歌	日本短歌社	二月一日	二三巻二号	短歌四八首。「夭折歌人作品集」欄に、塚本邦雄による一司の紹介文とともに掲載。
一九五三（昭和二八）年						
64	（2）漫画	メトード	メトード社	二月一日	二巻二号	短文。「FOYER」欄。
63	人間性と主題性	メトード	メトード社	二月一日	二巻二号	評論。
62	初等文法	メトード	メトード社	二月一日	二巻二号	短歌五首。

《報告》

杉原一司の手帳・ノート等未刊資料の年次（一）

この報告は、二〇二三年五月十五日の連絡会に予定していた口頭報告の台本のようなものを書き直したものである。予定していた報告は、後に掲げる未刊資料の分類のうち「創作」の全部十点につき、そこに書きつけられている短歌や文章の創作時期と、それが書きつけられたことよって手帳なりノートなりが「資料」になった時期、つまり資料の成立時期を考えた。その結論と結論にいたるまでの過程とを述べたものであった。当初の形は、短歌や文章の一部分を抄出して並べただけの簡単なものであったが、それだけでは喋っているうちに混線して自分でも訳がわからなくなると思い、間になぎの文を差し挟んでいこうと、四百字詰に換算すると、『未定稿1』について六十枚、そのほかの資料について六十枚、計百二十枚になってしまった。そんなものを読み上げてはとうてい時間たりなくなる。当日は要点をかいつまんで述べることにして、「台本のよなもの」は五月十日、岡村知子氏、杉田佳凜氏に急遽送付した。が、十五日の会は、優先すべき連絡や打ち合わせ、報告が多く、私の報告は後日に廻すことになった。

幸いであった。当日の杉田氏の報告に、『海嘯』（うみなり）に一司の短歌が四首掲載されているという一事があったからである。『海嘯』は、昭和十四年十月二十日に鳥取で発行された歌集である。その「後記」に、「終戦後の情脈、圓坐両誌上の全出詠者の作品を取めた」とある。後日、岡村氏に『圓坐』が鳥取県立図書館に所蔵されていることを教えられ、『情脈』の昭和十五年分、同十六年分、昭和二十四年分から同二十六年分までと、念のため第二次世界大戦中、鳥取県の歌誌を統合して作られた『國原』もあわせて調べてみた。

『情脈』、『國原』には一司の名も歌もみえなかったが、昭和二十二年八月二十日発行の『圓坐』第二巻第八号に、たしかに一司の歌五首が掲載されていた。『海嘯』掲載歌はそのうちの四首である。新たに投稿されたものではないらしい。そして、『圓坐』掲載歌のうち三首目から五首目までの三首が、配列の前後順は異なるが『未定稿1』の冒頭におかれている。

『未定稿1』のこの位置に、昭和二十二年八月発行の歌誌に掲載されている歌があることにより、私の考えは根底から覆ってしまった。なぜ、どのように覆ったのか、説明は無用であろう。ともかく『未定稿1』につき考え直し、書き直すことにした。

それがこの報告書である。「他文献との対応」その他で言及する『日本短歌』の「天折歌人作品集」、『短歌流域』の「期待する作家 オレンジ」も、右の杉田氏の報告によって知った。これらについて私が云々するのも恥ずかしいことであるが、上述のようなゆきで一足先に利用させていただいた。その結果『未定稿1』だけで八十枚余といっそう長くなったので、『未定稿1』挟み込み封筒」以下についての報告は割愛する。

未刊行資料にみえるのと同じの歌を他文献から探し出す、という基本の作業がまだ終わっていない段階で、このような報告は時期尚早かもしれない。しかし、必要な資料が揃ってからは、などといっていたらいつになるかわからないし、結局は揃わないかもしれない。そろそろ誰かが試みるのも悪くはないであろう。今後新たな一司関係資料が発見されて、この報告もまた根底から覆る、ということになったとしても、それはそれで喜ぶべきことである、と思うことにする。（田中 仁）

一 未刊資料の資料名と資料番号

杉原一司にかかわる資料には、一司の短歌や評論・エッセイ等が書きつけられた十数点、数え方によっては二十点ほどの手帳やノートなどがふくまれている。大部分が一司自筆である。それらの短歌、評論・エッセイ等はいづれ創作され、いつ手帳やノートに書きつけられたのか考えてみたい。

まず、未刊資料の一覧を掲げる。すべて杉原ほさき氏所蔵である。資料名は本報告にあたり仮に付けたもので、その上の○でくくったアラビア数字は枝番号、資料名の下の漢数字は杉原一司関係資料の仮整理番号、「1」、《内は、書きつけられている短歌等の冒頭である。なお、ノート（五四）とノート（二五五）とは、今私の手許にある写真では同一のノートのように見えるが、挟み込み紙が異なっている。ここでは付されている整理番号にしたがいしばらく別資料としておく。

【1】の（1）『未定稿1』（五二）「とうとうと」

- 【1】の(2) 『未定稿1』挟み込み封筒 「つむじなす」
- 【1】の(3) 『未定稿1』挟み込み紙1 「春の街は」
- 【1】の(4) 『未定稿1』挟み込み紙2 「樹を撲てば」
- 【1】の(5) 『未定稿1』挟み込み紙3 「時をも呪うて」
- 【2】散文集 虚無の角笛(五三) 「詩を書く者にとって」
- 【3】の(1) ノート(五四) 「書くといふこととは」
- 【3】の(2) ノート(五四)挟み込み紙1 「幕舎より」
- 【3】の(3) ノート(五四)挟み込み紙2 「高々と」
- 【4】歌稿 「楽しい朱墨の思出」
- 【5】中林則男歌集『落果』編集メモ(一四〇)
- 「歌集 落花 中林則男」
- 【6】緑表紙手帳(一四一) 「急ぐことも」
- 【7】黒表紙手帳(一四二)
- 「写生の異説抄記 伊藤左千夫の写生説」
- 【8】『俳句手帖』(一四三) 「群盗 木 凍る」
- 【9】雑記帖(一五〇) 《Au meme moment》
- 【10】雑記帖(一五一) 「宗教 一、宗教の本質」
- 【11】ノート(一五二)
- 「前略 昨日米9升三合いたぐきました」
- 【12】『詩論研究篇1 詩論 芸術論』(一五三)
- 「今日の倫理の問題と文学 三木清」
- 【13】ノート(一五四)
- 「メトード 第一号 昭和二十四年八月一日発行」
- 【14】の(1) ノート(一五五) 「書くといふこととは」
- 【14】の(2) ノート(一五五) 挟み込み紙 「日本国憲法の特徴」

二 未刊資料の分類

右に掲げた資料の大部分には日付がない。したがって、書きつけられている短歌、文章がいつ作られ、いつそこに書きつけられたのか推定するためには、年次のわかる他の文献と照合するという作業が必要になるが、具

体的な手順には、何が書きつけられているか、何に書きつけられているかによって相違がある。書きつけられているのが短歌の場合、たとえば『未定稿1』の第五首「疲れては」は、同一歌が『オレンヂ』第二巻第六号に掲載されているから、その印刷・刊行日の昭和二十三年七月二十五日・同八月一日が年次推定の手がかりになる。

一方、ノート(五四)に書きつけられている七編の短文・アフォリズムの場合は、六編目の、「樹々をしげらせ、芝生におほはれた沙漠の地質を分晰し、批評しやうとするのが僕達の言ふ「メトード」であり、これは意欲と野望から構成された土壤学である。(中略)無知と盲目のために世紀の大ギヤク殺の殉難者たる兄弟や友人たちへのさゝやかな供華として「メトード」は嘗々とその歩みを続けるであらう。」といった文言が手がかりになる。これと同一の文章は他の文献には見えないが、『メトード』創刊の辞として書かれたものであることは間違いないであろう。したがってこれは『メトード』第一巻第一号が印刷・刊行された昭和二十四年八月五日・同八月十日のすこし前に書かれたと推定できる。

また、ノート(五四)・(一五五)は、裏表紙右下に、「昭和二三年度第一・四半期・岡本ノート株式会社製造」と印刷されている。したがって、このノートに、「書くといふこととはそれ自体一個の生き方であり、世界を包摂したものである」云々と書きつけられたのは、ノートが製造された「昭和二三年度第一・四半期」以後のことになる。ただし、私には「昭和二三年度・第一・四半期」の意味がわからないので、まずそれを調べてみなければならぬ。

もう一つ例をあげるなら、『俳句手帖』には、「昭和二十四年二月一日印刷 昭和二十四年二月五日発行」と、印刷・発行日を記した奥付がある。したがってこれに「群盗 木 凍る」といった歌案や、「綿雲の中に消え没る釣革にぶらさがつてゐるおびたぐしい手」といった短歌が書きつけられたのは、昭和二十四年二月五日の頃より後のことである。

くりかえすと、資料の年次推定のための作業は、書きつけられている内容やそれが書きつけられている物によって具体的手順が異なる。そこで、右に掲げた一司の未刊資料を、内容によって次のように大きく五つにわけると、同一の資料に別の内容が含まれている場合は、*を付けて併存している別内容を示す。

I 創作（主として短歌。俳句・詩もふくむ）

- 【1】の（1）『未定稿1』
- 【1】の（2）『未定稿1』挟み込み封筒
- 【1】の（3）『未定稿1』挟み込み紙1
- 【1】の（4）『未定稿1』挟み込み紙2
- 【1】の（5）『未定稿1』挟み込み紙3
- 【3】の（2）ノート五四挟み込み紙1 *金銭出納
- 【3】の（3）ノート五四挟み込み紙2
- 【6】緑表紙手帳（二四二）
- 【7】黒表紙手帳（二四二） *思索、編集、職務
- 【8】俳句手帖（一四三）

II 思索

- 【2】散文集 虚無の角笛（五三）
- 【3】の（1）ノート（五四）
- 【7】黒表紙手帳（二四二） *創作、編集、職務
- 【11】ノート（二五二） *書簡
- 【14】ノート（二五五）

III 学習

- 【9】雑記帳（一五〇）
- 【11】雑記帖（二五二）
- 【12】詩論研究篇1 詩論 芸術論（一五三）
- 【14】ノート（二五五）挟み込み紙

IV 編集

- 【4】歌稿（五五）
- 【5】『落果』編集メモ（一四〇）
- 【7】黒表紙手帳（二四二） *創作、思索、職務
- 【13】ノート（一五四）

V 書簡下書（または書簡控）

- 【11】ノート（二五二） *思索

VI 職務

- 【7】黒表紙手帳（二四二） *創作、思索、編集

VII 金銭出納

- 【3】の（2）ノート五四挟み込み紙1 *創作

三 作歌・資料成立の年次

I 創作にかかわる資料

本報告でとりあげるのは、Iの創作にかかわる資料のうち【1】の（1）『未定稿1』である。まずはじめに、「内容」として何が幾つ書きつけられているかを示す。先回りしていうと『未定稿1』には短歌が六十首書きつけられている。次に、書きつけられている短歌と同じものを発行日のわかる他の文献の中から探しだし、その結果を「他文献との対応」として掲げる。そして「年次」において、書きつけられている短歌が歌誌に投稿された年次、その歌が作られた年次、さらに成立した年次を推定する。なお、◇でくくって歌の頭に付したアラビア数字は歌番号である。各資料における第一首を〈1〉、第二首を〈2〉とし、第三首以下はこれに準ずる。推敲の跡や傍書がある場合、その文字の位置や語句の意味によっては、それらを推敲とするか、独立の歌案とするかよくわからないことがあるが、すべて私見により定めることとする。判読できない箇所は、文字は□、文字数もわからない場合は「」によって示し、削除されている文字、語句は——線を重ね書きすることによって示す。引用にあたっては、固有名以外の漢字は新字体に統一する。濁点、句読点、ふりがなはもとのままである。杉原一司、塚本邦雄の書簡の書簡番号、引用、執筆年次は、岡村知子ほか編『杉原一司 塚本邦雄 往復書簡』（鳥取大学地域学部 二〇二二年三月二五日刊）による。

【1】の（1）『未定稿1』

『未定稿1』は特製の冊子である。厚紙表紙のついた丁寧な作りで、料

紙の藍色野四百字詰原稿用紙は「(杉原)」のネーム入り、青インクで書かれた文字の筆致も、速いけれどほぼ全編をとおして落ち着いている。題も付けられ、いわゆる中抜き文字で『未定稿1』と、表紙に大きく書かれている。一見したところ一司自選の歌集である。そうであるなら「編集」の部に入れなければならないが、ここで「創作」類としたのは、中に、

〈51〉うけりゆく雲のけはしき朝けには鏡に青くまゆの映れる

〈60〉樹々に鳴る風に聴くべし肉体を持ちてわれの哀歎の音楽

のように、いわば歌が動いている例があり、特に〈51〉は、その動きが後に掲げるように『花軸』七集の〈1〉と直結しているからである。しかし、微弱な根拠ではある。自選歌集という印象には捨てがたいところがあるが、この点については結びでもう一度ふれることとして、ここでは創作にかかわる資料として作歌年次・成立年次を検討する。

○内容 短歌六十首

○他文献との対応

『未定稿1』の本文をゴシック体、対応する他文献の歌を明朝体で示し、異同のある個所に傍線を付す。なお、他文献のうち、一司没後に塚本邦雄によつて選歌・編集されたと考えられる『日本短歌』第二十三巻第二号(昭和二十八年二月一日発行 二月号)の「天折歌人作品集」、選歌・編集したことを塚本自身が明言している『短歌』昭和三十一年八月号「初等文法」、現代短歌大系第十一巻『新人賞作品・天折歌人集・現代新鋭集』「あくびする花」との対応はとりあげない。また、ノート(二五四)との対応も、原則として取りあげない。ノート(二五四)は編者・筆者未詳で、全七十七首のうち、二首がノート(五四)挟み込み紙2と対応しているほかは、『詩歌祭』・『花軸』・『メトード』三誌の掲載歌の筆写と思われるからである。

◇『圓坐』第二巻第八号(昭和二十二年八月二十日発行)との対応

〈1〉とうとうと貝がら笛もならしたき宵なりひとよ灯を高く吊れ

〈4〉とうとうとかひがら笛も鳴したき宵なりひとよ灯を高く吊れ

「論落」全五首その第四首

〈2〉歩調はいつも高くあれよとみづからを追ひたてて鞭の風を切る音

〈3〉歩調はいつも高くあれよと自らを追ひたてて鞭の風を切る音

「論落」全五首その第三首

〈3〉きよ若くをとめはあれよ霧の夜の淫婦にとひて道を折れゆきぬ

〈5〉きよ若く処女はあれよ霧の夜の淫婦にとひて道を折れゆきぬ

「論落」全五首その第五首

◇『オレンヂ』第二巻第六号(昭和二十三年八月一日刊)との対応

〈5〉疲れては夢もかたちはかなきに帰りてともすうす紅の燭

〈3〉疲れては夢も形のはかなきに帰りてともすうすへの燭

題なし 全五首その第三首

〈6〉殉難のものがたり読むこのゆふべ燃えただれおつ陽を見たりけり

〈1〉殉難のものがたり読むこの夕べ燃えただれおつ陽を見たりけり

題なし 全五首その第一首

〈7〉やすらかにわれ等は生くれいまもなほ崖よりわかれゆく岩のあり

〈4〉安らかに我等は生れれ今もなほ崖より別れゆく岩のあり

題なし 全五首その第四首

〈9〉霧のふる夜燈があはしちかよりに照しいださむさいはひもなく

〈2〉霧のふる夜燈が淡く近寄りて照らし出さむ幸ひもなく

題なし 全五首その第二首

〈14〉砂ほこりうづまく中を逃げぬしが覚めての夢のかくもしづけき

〈5〉砂埃うづまく中を逃げぬしが覚めての夢のかくもしづけき

題なし 全五首その第五首

◇『新聲』(昭和二十三年二月一日発行)との対応

〈19〉曼珠沙華ゆめと咲くあの湖ぞひの段々島をこえて帰りぬ

〈3〉曼珠沙華ゆめと咲くあの湖ぞひの段々島を越えて帰りぬ

題なし 全五首その第三首

〈28〉街々のいらかのはてに陽は没いぬひとよあたたくやく眠らな

〈2〉街々のいらかのはてに陽は没いぬひとよ暖かにやく眠らな

題なし 全五首その第二首

〈30〉辻のべに香具師のあやつる毒蛇を見てやすらげるころが知れず

〈4〉辻のべに野師のあやつる毒蛇を見てやすらげる心が知れず

題なし 全五首その第四首

〈34〉いづこともあらずとけるあかときの光とわれの夢まぢはりぬ

〈1〉いづこともあらずとけるあかときの光と吾の夢まぢはりぬ

題なし 全五首その第一首

〈41〉帰りゆく鳥がかなしと夕映えの雲にまぎれしある日の想念

〈5〉帰りゆく鳥がかなしと夕ばえの雲にまぎれしある日の想念

題なし 全五首その第五首

◇『花軸』七集（昭和二十三年二月二十日刊）との対応

〈51〉かけりゆく雲のけはしき朝けには鏡に青くまゆの映れる

〈12〉かけりゆく雲のけはしき朝けには鏡に青く眉の映れる

「暗夜篇」一五首その第一二首

◇杉原一司宛塚本書簡【24】（昭和二十三年七月六日）との対応

〈18〉あざやけき死のちらちらとうかびくる日ぐれは禽も啼くとせなくに

〈48〉押せば開くとびらくぐりて出でしときひくくたれたる雲をみとめぬ

「鳥も啼かうとせぬ夕ぐれの風景の中に死といふものが鮮かな像となつて顯

つゝくる」

「廻転ドアをくるりと押して出たとき重苦しく垂れ下つてゐる雲を

見た」といふ風な意味の貴兄の作品を思ひ出します。

◇『短歌流域』第六号（昭和二十四年五月一日発行）との対応

〈48〉押せば開くとびらくぐりて出でしときひくくたれたる雲をみとめぬ

〈3〉押せば開くとびらくぐりて出でしときひくくたれたる雲をみとめぬ

題なし 全四首その第三首

◇『海嘯』（昭和二十四年十月二十日発行）との対応

〈2〉歩調はいつも高くあれよとみづからを追ひたてて鞭の風を切る音

〈3〉歩調はいつも高くあれよと自らを追ひたつ鞭の風を切る音

題なし 全四首その第三首

〈3〉きよ若くをとめはあれよ霧の夜の淫婦にとひて道を折れゆきぬ

〈4〉きよ若くをくはあれよ霧の夜の淫婦にとひて道を折れゆきぬ

題なし 全四首その第四首

少し補足する。『新聲』掲載歌五首の作者名は、「松原一汀」になっている。この点については、「杉原一司著作目録」（「杉原一司全集のために一準備稿（二）」）本誌第十九卷第三号 令和五年三月）、およびそれを補訂した「杉原一司既刊著作目録（補訂版）」（本誌本号）の「（いづことも）」の備考欄に略記した。「短歌」欄には「松原一汀」をふくむ三十六人の作品が掲載されている。その中に「杉原一司」はない。いっぽう目次には「松原一汀」の名はなく、「杉原一司」はある。「短歌」欄と目次との間には、ほかに「短歌」欄には四首掲載されている「藤枝正樹」の名が目次にはなく、また「短歌」欄の「横尾登米雄」を目次は「横尾登米雄」とする、という食い違いがある。「松原一汀」も「杉原一司」の誤りであることは容易に察せられるが、『新聲』の掲載歌五首全部が『未定稿1』に収められていることよって、「松原一汀」は誤りであると断言することができ。なお、昭和二十三年二月一日発行の『新聲』は巻号不明のため、たんに『新聲』と記す。

『短歌流域』掲載歌は、塚本邦雄「期待する作家 オレンジ」に紹介されている四首のうちの第三首である。発行は奥付に昭和二十四年五月一日とある。しかし、この文章について、塚本はそれより四ヶ月以上前の昭和

二十三年十二月二十三日 of 書簡【6】で、

地方二流綜合誌「短歌流域」より註文の「期待する作家」オレンヂの巻、書いたつて無益なことですが、といつてでたらめもかけず(中略) 貴兄を最初に船津、生島、東、の諸氏をあげ終りに新井をつけ加へておきました。

と報じている。

このほかに、(2)の、

かるやかに踊る女人の手の足ののびのびとよき均整は見よ

が、ノート(五四)挟み込み紙2の(9)、

舞台せましと踊る女人の手の足の伸び／＼とよききんせいをみよ

と対応している。この点については、「【3】の(2)ノート(五四)挿み込み紙2」の項に述べる。さしあたつてここでは、ノート(五四)挟み込み紙2全九首に、年次のわかる他文献の収録歌と対応する歌はない、したがつて、ノート(五四)は『未定稿1』の作歌年次、成立年次推定の根拠にはならない、ということを確認しておけば足りる。また、『海嘯』の二首は、説明は省略するが編集委員により『圓坐』からとられたものと考えられるので、これも『未定稿1』にかんする年次推定の手がかりにはならない。

○年次(一)——塚本邦雄『殘花遺珠』の『未定稿1』紹介

塚本邦雄『殘花遺珠 知られざる名歌』(邑書林 一九九五年六月一日刊)の、「杉原一司」に、一司の手帳等について、「私の手許には今、既に引用の箇所を含む断簡の他に、令子夫人から預つた手帖・備忘録・歌篇ノート等が数十種、目方にして約三疋保存してある。」として、『未定稿1』は次のように解説されている。

遺稿の「未定稿」は再生紙紺野の原稿用紙が五十枚、厚い表紙つきの無線綴で立派に製本され、標題「未定稿」は輪郭を白描風に描き出してある。作品そのものは冒頭から十枚に、六十首が浄書されて、中には既に「短歌」昭和三十一年八月「戦後新鋭百人集続篇」中に掲げられた六十首と重複するものも混る。「メトード」創刊に最も近い、未発表の下限と考へられ、抄出した二十七首の末尾六首などは、二十歳の一司の可能性が鮮やかに描き出されてある。

『メトード』第一巻第一号創刊号は、昭和二十四年八月五日印刷、同日発行である。これにもっとも近い、「未発表の下限」であり、かつ「二十二歳の一司」の作であるということは、一司は大正十五年(昭和元年)八月二十七日生まれ(安藤隆一・杉原ほさき氏作成「杉原一司関係年譜」『杉原一司歌集』綜合印刷出版 二〇二〇年三月三十一日刊)であるから、「末尾六首」をふくむ六十首は昭和二十二年八月上旬頃から翌二十四年八月下旬頃までに作られた、ということになる。

その中の「末尾六首」とは、次のような歌である。

樹々に鳴る風に聴くべし肉体を持てるわれらの哀歎の

とうとうと貝殻笛も鳴らしたき宵なり人よ灯を高く吊れ

羊皮紙の密図に見える矢印の赤きをせめて今日の信とす

棕櫚の葉の蔭となるその商談は愛妾一人くれてやる件

氷菓店の塀の新聞紙の朱書はコレラマンエン・コールドウオー

裂けて地にある花びらに人間の童話を聞かす。五月某日

しかし、これらのうち『未定稿1』に収められているのははじめの二首で、「樹々に鳴る」が六十首目、結句は「哀歎の」になっている。「とうとうと」は一首目である。このほかの四首は『未定稿1』にみえない。「羊皮紙の」は、『俳句手帖』(一四三)にある歌、「棕櫚の葉の」も『俳句手帖』に「しゆろの葉の蔭となる卓商談は愛妾ひとりくれてやる件」とあり、『メトード』第一巻第二号(昭和二十四年九月十日刊)には、早川則之名義で、「棕櫚の葉のかげになる卓商談は愛妾ひとりくれてやる件」の形で載っている。「氷菓店」も『俳句手帖』に、「氷菓店 塀 新聞紙 赤インク コレラマンエン コールド・ウオー」としてみえる。「裂けて地に」も同じく『俳句手帖』にあり、「裂けて地にある花びらひろひ人間の童話をきかす。六月、五月」の、「六月」に縦線二本が重ね書きされている。「六月」を「五月」と直したのか、「六月、五月」の「六月」を削除したかわからない。句読点は小さな黒楕円であるが、「きかす」の下の点のほうがおわずかに大きく中央部の黒が薄いので句点とし、「六月」の下のほうは読点と判断した。「末尾六首」以外では、十二首目の「まがふなき」、十三首目の「手の甲を」は、『未定稿1』そのものではなく、挟み込まれている封筒に書かれている。

一司を知ることのおそらくもつとも広く深い塚本の言と所為とは尊重されねばならないであろう。『俳句手帖』は前記のように昭和二十四年二月

五日に発行されているから、「羊皮紙の」以下四首は、たしかに「メトード」創刊に最も近い、「未発表の下限」であろうし、「二十二歳の一司の可能性が鮮やかに描き出されてゐる」というのも、私の理解のおよばない領域ではあるが、そうなのかもしれない。しかし『未定稿1』の歌の作歌年次、『未定稿1』成立年次については別途検討してみる必要があると思う。

そこで、大まかに考えれば次のようになる。

『未定稿1』の六十首のうち、三首が『圓坐』第二卷第八号（昭和二十二年八月二十日刊）に、五首が昭和二十三年八月一日刊の『オレンヂ』第二卷六号、別の五首が昭和二十三年二月一日刊の『新聲』（巻号未詳）、一首が昭和二十三年二月二十日刊の『花軸』七集に掲載されている。こうした掲載状況をふまえて、歌誌へ投稿してから刊行まで一ヶ月から二ヶ月ほどかかると仮定すると、これら十四首は、早いものは昭和二十二年の六月中旬頃まで、遅いものは翌二十三年一月中旬頃までに作られた歌である。また、二首が、昭和二十三年七月六日に書かれた杉原一司宛の塚本邦雄の書簡で言及されているから、合計十六首の作歌の下限は昭和二十三年七月頃ということになる。残る四十四首もその頃の作ではないかと推測される。そして、これら六十首が『未定稿1』に書きつけられた、つまり資料『未定稿1』が成立したのもその頃のことであろう。

後日報告を予定している『未定稿1』以外の創作関連資料についての考察とのバランス、という点では、これだけでいいのかもしれない。しかし、歌数六十首、対応する歌誌六誌、短歌十四首という数は、他の創作関連資料とくらべて格別に多い。加えて二首、塚本書簡で言及されている。もう少し何か考えることができるのではないかと思う。

○年次（二）——『圓坐』、『オレンヂ』、『新聲』、『花軸』への投稿年次

『未定稿1』にみえる歌を掲載している六誌のうち、もっとも刊行年次の早いのは、昭和二十二年八月十五日印刷、同二十日発行『圓坐』第二卷第八号である。この歌誌については、歌集『海嘯』（枝野登代秋編 圓坐 莊 昭和二十四年十月二十日発行）の、昭和二十四年九月六日付け、「圓

坐 莊 枝野登代秋」名の「序」に、自らの主宰する歌誌『情脈』の戦中・戦後における動向を回顧しつつ、次のように説明されている。

戦争は純粋な歴史的運動を破砕して、一果一誌を実現し、全歌誌を情脈に併合して改題國原となり、自由律作品まで収録して文字通り國際都市を結成した感であつたが、更に戦争末期に至つて休刊命令となつて終戦を迎へたのである。休刊中熱心な同好の総意に應へて歌誌悠紀を刊行して血脈をつなぎ、圓坐創刊へ結びつけて圓坐三年の歴史が聞かれ、更に本年一月同志達の切々の希ひから情脈復活となつて軌道に乗り、（後略）

『海嘯』は表紙に「情脈二百号記念叢書第十七編」、扉にも「情脈二百号記念」とあるが、「後記」によれば当初は『圓坐』の終刊記念集として企画されたという。

『情脈』の流れをくむ鳥取の歌誌に、どのような事情・経緯で一司の歌が掲載されたのか不明である。しかし、それはともあれ、『圓坐』第二卷第八号に、五首の一司の歌が掲載されている。先に「他文献との対応」に掲げた三首の前に、『未定稿1』には見えない、

獣肉をつるせる店のまへゆくとつみの意識の消しざりがたき

街路樹に照る夕陽かげ妻ならぬ女体をおもふあはれしきりに
の二首があり、計五首である。題に「論落」とあるのは「論落」の誤りであろう。以下「論落」と呼ぶ。

刊行された歌誌との関係により、『未定稿1』の歌の作られた年次、書きつけられた年次を考える時、重要なのは印刷日・刊行日そのものではなく、そこから推測される一司が歌を投稿した日である。しかし、『圓坐』の場合、第二卷第八号直前の第六号に、新会員が増加し会の内規につき問い合わせが多くなったので「回答にかえる意味から茲に清記を届けることにした」として、諸規定を記した文書が一枚挟み込まれている。それによれば、会員に会員、準同人、同人、編輯同人の四種があり、それぞれについての会費や投稿歌数制限は示されているが、投稿期限についての規定はない。次にとりあげる『オレンヂ』は、原則として毎月二十五日印刷、翌月一日発行、投稿締め切りは前々月十日であった。すぐ後に掲げるように『オレンヂ』の印刷日は二十五日、発行日は一日になっているから、入稿から印刷までに一ヶ月半ほどかかるという計算である。編集・印刷に要する日数は歌誌によって様々であろうが、これを参考にして、少しはばを持

たせて一ヶ月から二ヶ月と考えると、昭和二十二年八月十五日印刷、同二十日発行の『圓坐』第二巻第八号への投稿は、六月中旬から七月中旬頃までの間だったと、いちおうは推察される。

「いちおうは」と言わざるを得ないのは、一司と『情脈』・枝野登代秋との関係がほとんどわからないからである。一司が鳥取の歌壇と没交渉ではなかったことは、塚本宛書簡【39】（昭和二十三年八月六日）に、

「こんど東京中心全国的の二十代歌人グループが出来る由。スイセンするやうに各県（あるひは各結社もだらう。）に言つて来てゐる由。こいつはのがされぬ。僕はオレンヂでやつてもらはずとも本県の方でやつてくれたとのこと。」

とあることからうかがわれるし、枝野との関係も、書簡【1】（昭和二十三年二月二十一日）の、

本県にはオレンヂは十人たらずです。枝野登代秋氏、石塚敏夫氏が重となる人々です。

また、前川佐美雄の一司宛書簡（二七）（昭和二十一年八月七日。岡村知子ほか編『杉原一司宛前川佐美雄書簡』鳥取大学地域学部 二〇二一年三月二五日刊による）の、

（前略）今月中（大抵二十日頃）にはもうあと二、三千円送りますから前に申したのでなくとも御都合のいいやうにしておいて下さい。然しそのころには多分お邪魔出来る筈です。十月号の編輯前か後かを考へてみますので、決め次第お知らせしますが、その時は前に枝野にも知らせて歌会の方も準備して頂きます。等からうかがわれる。

しかし、『圓坐』に一司の歌が掲載された経緯はわからない。『圓坐』の他の号にも、『情脈』の昭和十五、十六年、同二十四、二十五年分、『國原』全巻にも一司の歌はない。これらに一司の名のみえるのは、『圓坐』第十七巻十号（昭和二十三年九月二十日刊）に、昭和二十三年八月二十九日に鳥取中央図書館（現鳥取県立図書館）児童室で開催された前川佐美雄・保田與重郎の歓迎歌会の参加者の一人として出ている一度だけである。『悠紀』は所在がわからない。いっぽうの一司関係資料に、『圓坐』の名がみえるのも一度だけである。黒表紙手帳（二四二）の半ばあたり、雑誌一頁分の文字数と思われるものをふくむ計算式が書きつけられている頁の隅に、「円坐」とある。黒表紙手帳は昭和二十二年七月十日発行の『花軸』第四

号「思ふ」の三首が書きつけられていることから、昭和二十二年初夏の頃手許にあったものと思われるが、計算式との関係の有無、「円坐」とあることの意味はわからない。したがって、昭和二十二年六月中旬から七月中旬頃までの間に投稿されたというのは、あくまでも会員なり同人なりの人として普通に投稿していたのなら、という限定付きの推定にとどまる。投稿年次は未詳としておくのが妥当であろう。

『オレンヂ』の場合もことは複雑である。一つには、「毎月一回一日発行」をうたいながら、実状は主宰者の前川佐美雄自身、「これでは季刊雑誌にも追いつかない」（第二巻第六号「編輯後記」）と自嘲するほどだったからである。第一巻第一号から三巻一号までの印刷・発行の年次をそれぞれの奥付にしたがって掲げるなら次のようになる。

一巻一号	昭和二十一年十月二十五日印刷	同年十一月一日発行
一巻二号	昭和二十一年十二月二十五日印刷	昭和二十二年一月一日発行
二巻三号	昭和二十二年二月二十五日印刷	同年三月一日発行
二巻四号	昭和二十二年九月二十五日印刷	同年十月一日発行
二巻五号	昭和二十二年十二月二十五日印刷	昭和二十三年一月一日発行
二巻六号	昭和二十三年七月二十五日印刷	同年八月一日発行
二巻七号	昭和二十三年十一月二十五日印刷	同年十二月一日発行
三巻一号	昭和二十三年十二月二十五日印刷	昭和二十四年一月一日発行

第一巻第一号以来毎号、奥付に前記のように「毎月一回一日発行」とあり、「規約抄」には、これも毎号変わらず「前々月十日」までに投稿することとあるが、右のような状況ではいつ投稿すれば、たとえば二巻六号なら二巻六号に載るのか、逆から言えば二巻六号に掲載されている歌はいつ投稿されたのかわからない。

ことを複雑にしている原因はそれだけではない。第二巻第五号の前川佐美雄による「後記」には、

今月は紙数の都合上会員の作品を若干割愛して次号に廻すことにした。三十二頁ではこれもまことにやむをえないことである。

（第二巻第五号「後記」）

とある。『オレンヂ』に会員と同人の区別があったのかどうか、あったとしたら一司はどちらだったのかよくわからないが、第六号には五号に載るはずであった歌もふくまれているのである。

さらに挙げるなら、少し後の奈良在住時のことではあるが、一司は、いったん『オレンヂ』第七号に投稿した「《コッペリア》—バレエ」が結局は掲載されなかった顛末を塚本宛書簡に記している。それを見ると、投稿の時期はいつそうわからなくなる。

まず、【50】（昭和二十三年九月五日）に、「今奈良から帰ったところ。（中略）今日はオレンヂ七号の編輯でした。」と言い、少し後に、

僕は七号の原稿こつそりもつて帰りました。次のやうなもの：

として、「《コッペリア》—バレエ」の題と、「魂なく」等六首を掲げ、等々、先生けなされた作品です。

つづいて書簡【53】（昭和二十三年九月十七日）には、次のようにある。

バレエの歌、そんなに賞めていたごくやうな歌ではありません。しかし、あの歌を見ていつになく先生はあつさり、「つまらんね」と仰つた。私は「勿論」と答へて置きました。

『オレンヂ』七号（第二巻第七号）は、昭和二十四年十一月二十五日印刷、十二月一日発行と奥付にあるが、その編集会議が十日ほど前の九月五日に開かれている。もし一司が歌稿を郵送していたのなら、当然それより前に発送しているはずである。この文面、とくに、「あの歌を見ていつになく先生はあつさり」と「つまらんね」と仰つた」は、編集会議の席上、かねて投稿していた「《コッペリア》—バレエ」が組上に載った際のことのようにも見える。しかし、書簡【51】（昭和二十三年九月九日）には、

帰る頃になつて先生が、「杉原君歌を出さないか。」私、「いろんな歌をやつてゐるのではぶかしいです。先生「かまはんぢやないか」（後略）

といった佐美雄とのやりとりが書きとめられている。「《コッペリア》—バレエ」を投稿されたものと、佐美雄は思っていないように見える。一司の側も、たんに批評を求めるために佐美雄在宅の確実な編集の日に持参したようも見える、しかし実は急遽投稿するつもりでもある、といった曖昧な風であった、が、右のような反応だったのでこつそりと持ち帰った、ともとれる。一司の塚本宛書簡を見ていると、前川佐美雄の懐の深さに陰に陽に甘えているやうな気配が時々感じられるが、この場面もそうであった

ように私には思われる。こうした甘えが、具体的な所為は異なるにしても『オレンヂ』への一司の投稿にはしばしばあったのではないかと想像される。

結局のところ、第二巻第六号に掲載されている歌を一司はいつ投稿したのかよくわからない。三号掲載のつもりが三号でも、四号、五号でも後回しにされて一年半後の六号に掲載された、四号のつもりが二号にわたって後回しにされ六号掲載になった、とは考えにくい、五号のつもりで投稿したが六号に回された、ということはある。その場合、四号発行からあまり隔たらない昭和二十二年十月頃の投稿ということになる。これに対して、はじめから六号掲載を意図しての投稿であったなら、遅ければ六号印刷の昭和二十三年七月二十五日の一ヶ月ほど前、六月下旬頃投稿である。ただし、昭和二十四年十一月二十五日に印刷納本、十二月一日に発行された七号の編集会議が開かれたのが二十三年九月五日であったことに準ずるなら、六号印刷より十日ほど前の昭和二十三年五月下旬頃投稿ということになる。『オレンヂ』第二巻第六号掲載歌はいつ投稿されたのか、やはりよくはわからないが、ひとまず昭和二十二年十月頃から翌年五月下旬頃までの間としておくことはできそうである。

『新聲』は昭和二十三年一月二十七日印刷、二月一日に発行されている。編集の経緯、刊行までの状況は『オレンヂ』とはまた別の意味でわかっているが、投稿を受け付けてから印刷・発行まで一ヶ月から二ヶ月ほどかかるすると、昭和二十二年十一月下旬までには投稿されていたと想像される。ただし、無署名の「編輯後記」に、「種々の理由で、準備期間が余りに短かつたために充分なことができなかったが」とか、「旧臘と一月に在京の者が二三回あつまつて、編集の方針その他について協議した」などとあり、編集が順調ではなかった様子がうかがわれる。投稿との関係について推測すると、投稿は受け付け済みだが編集の方針が定まらなかったのか、編集の方針が定まらないので募集なり依頼なりができなかったのか、どちらもありそうであるが、いずれにせよ二十二年十一月下旬から十二月下旬までと限定せず、そのあたりを中心にしてゆるやかに考えるほうがいいかもしれない。

『花軸』第七集は昭和二十三年二月十五日印刷、同年二月二十日発行である。入稿から印刷、発行まで一ヶ月から二ヶ月ほどとすると、【51】を第十二首としてふくむ「暗夜篇」第全十五首は、昭和二十三年一月中旬に

は投稿されていたことになる。しかし、『花軸』は規模の小さい同人誌であり、頁数も活字版になった五集以降は八頁と少ない。編集、印刷・製本に要する時間は『オレンヂ』や『新聲』よりも少なかったはずである。第六集に掲載されている「陶酔の韻律」の末尾に「一九四八・一・二」という日付がある。第六集印刷日一月十五日の二週間前である。これらを勘案するなら「暗夜篇」も一月末頃の投稿で遅すぎはしなかったであろう。

問題は、「暗夜篇」十五首のうち、『未定稿1』に収録されているのは一首のみであることである。たしかに『未定稿1』は、歌誌に投稿した歌または掲載された歌をすべて書きとめたものではない。『オレンヂ』第二巻第六号、『新聲』それぞれの五首は五首とも収められているが、『圓坐』の場合は五首のうち収録されているのは三首である。しかし、十五首のうちわずか一首というのはあまりに少なすぎる。そこには何らかの事情があったのではないかと思われる。

『花軸』第五集は、奥付によれば昭和二十二年九月二十日印刷、十月一日発行で、一司の作物としては短歌「路上」五首、短文「エッセイ的傾向について」、「世代①」が載り、次の六集は同じく奥付によれば昭和二十三年一月十五日印刷、二十日発行で、「陶酔の韻律」が載っている。短歌はない。「杉原一司著作目録」・「杉原一司既刊著作目録(補訂版)」(前出)にあるように、『花軸』創刊号から第五集まで、一司は毎号短歌と評論・エッセイとを載せている。ところが第六集は「陶酔の韻律」一編のみである。

この「陶酔の韻律」につき、塚本邦雄は、次のように賞讃している(書簡【3】昭和二十三年二月二十三日)。

「花軸」熟読いたしました。啓発されるどころ多く特に「韻律」及び「批評性」に関する貴兄の言は今の僕にするどくひづくものがありました。

これに対して、一司は、

「陶酔の韻律」は試論にすぎません。あの中には矛盾があります。と、謙遜しているようでもあるが、すぐつづけて、

しかし、私は矛盾のままであれを投げだしました。

と言い(書簡【4】昭和二十三年三月四日)、その四ヶ月余り後にも、①萩原朔太郎、②西脇順三郎の音楽論と、③「陶酔の韻律」とを比較して、一般的、総括的にみてどうでせう。①②③は全然別の意見でせう。最

近②の意見をみてやゝおどろいた。③は①とは反対だが、②の前に出るとどうもはづかしい。②は勿論古典主義的解釈か、「シニールは唯物主義だ」式の解釈。①フンキキ的な釈明、③は僕流の無茶苦茶流です。

とも言う(書簡【2】昭和二十三年七月十五日)。ノート(五四)に書きつけられている、

書くこととは不分明なものに対する戦ひだ。その配列を正し、見、知ることへの行動的な道程なのである。

という言葉をなぞるなら、「陶酔の韻律」は、短歌の韻律の「配列を正し、見、知ることへの行動的な道程」を極限まで突き詰め、さらにその先に踏み出そうとした「戦ひ」であったであろう。塚本宛書簡の右のような文章からも、この四百字詰原稿用紙五枚半ほどの、けっして長くはない文章が、精一杯の力で書かれたものであること、そしてそれによって一司の得たものの大きさが伝わってくる。

こうした状況をふまえて考えると、「暗夜篇」は次のような経緯で七集に掲載されるにいたったと想像される。

〈5〉は、第五集はすでに編集を終えた昭和二十二年九月から十月の頃作られた。一司はこれを『花軸』六集に掲載する心づもりであったが、そのためには一首だけではなくもう少し歌数が必要である。しかし、「陶酔の韻律」の構想・執筆のため、おそらく遅くとも昭和二十二年十二月末であった第六集の投稿期限までにしかるべき歌が作れず断念、「陶酔の韻律」擱筆後、昭和二十三年一月の冬のうちに作った歌とともに次の七集に投稿・掲載した。七集へ投稿・掲載することを決めたのは、早ければ六集の印刷された二十三年一月十五日頃、遅くとも二十三年二月十五日の七集印刷の半月ほど前、二十三年一月末の頃であった――。

「暗夜篇」のうち明瞭に季節を表現している歌は、

〈1〉何を手よはらひのけむとせるやいま冬月しろく冴ゆる宙にて

〈7〉雪原の雪より細くのびあがりなに凌がむとして躍る樹ぞ

の二首で、どちらも冬であることも、こうした推測と符合している。

〈4〉しろがねの月冷えゆくと山かげによりそひ眠る樹々のひそけさ

〈14〉ひややくあまりに高くひかるゆゑ星見ゆる窓にそむきて眠る

も、冬のように感じられる。

〈10〉なまぬるきかかると暗夜をのびてゆく白き菌糸とわが愛慾とは、冬と言いつけるのは多少ためらわれるが、この「なまぬるき暗夜」には、いかにも菌糸ののびそうな、たとえば晩春とか梅雨とかより、冬のなまあたたかい夜のほうがふさわしいように思う。

上述した四誌への投稿時期をまとめて示すと次のようになる。推定投稿年次の早いものほど『未定稿1』では前の方に配置されており、『未定稿1』の六十首は、『圓坐』八号、『オレンヂ』六号、『新聲』、『花軸』七集それぞれの掲載歌という大きい括りにしたがって選ばれているようにみえる。しかし、『花軸』七集掲載歌は「暗夜篇」十五首のうち一首のみである。加えて他文献との対応の調査はまだ中途である。現時点では、単純明快に作歌順に配列されているわけではなさそうだ、程度のことしか言えない。

『圓坐』第二巻第八号：昭和二十二年六月中旬から七月中旬頃までの間の可能性はあるが、未詳。

『オレンヂ』第二巻第六号：昭和二十二年十月頃から翌年五月上旬頃までの間。

『新聲』：昭和二十二年十一月下旬から十二月下旬頃か。

『花軸』第七集：昭和二十三年一月十五日頃から一月末頃までの間。では、『未定稿1』はいつ成立したのか。右のような推測にもとづいて、さらに推測をかさねるなら、『未定稿1』の成立は、

昭和二十三年一月始め頃から末頃までの間

と考えられる。昭和二十三年一月始め頃から末頃までの間とは、『花軸』第六集のため「陶酔の韻律」を書き上げた昭和二十三年一月二日から、〈51〉以外の『暗夜篇』十四首が作られる前までの間である。「陶酔の韻律」構想・執筆中には、このような特製本を作る余裕はなかったであろうし、もし十四首を作った後であったら、〈51〉とともに『未定稿1』に収めたであろう。もちろん、十四首作歌の前に『未定稿1』は成立していたとしても、〈60〉の後ろに十四首を書き足すことは容易であろう。それをしなかったのは、このような歌集をつくる意味がなくなつたのではないかと思う。なお、『未定稿1』の成立を右のように推定すると、『オレンヂ』六号への推定投稿時期の下限が昭和二十三年五月上旬頃であることと抵触する可能性もある。しかし、『未定稿1』は投稿した歌の控えである、と判明しているわけではない。また、二十二年五月上旬頃はあくまでも推測上の

下限である。『オレンヂ』六号掲載の五首〈5〉〈6〉〈7〉〈9〉〈14〉は、歌の中に明確に季節をあらわす語や句がないが、〈9〉「霧のふる」は、

〈8〉秋きよき梢にいくどかけのぼりふれど破れし旗はそよがぬと、

〈11〉秋ふけてこころ渴けば鱗々と杳きわたちの音もきこゆる

との間にあり、かつ初句の「霧のふる」は秋の印象がつよい。また、〈14〉は、秋の歌である〈11〉と、

〈15〉冬やまの崖のましたに凍てて立つ石あり神のごとくかなしもという冬の歌の間にある。もしも一司の歌にみえる季節と彼がその歌を作った季節とが密接に結びついており、たとえば春を明示する語や句をふくむ歌の多くは春に作った歌だと言えるなら、これら二首は秋または秋から冬のうちに作られていた可能性が大きい。昭和二十三年五月をまつまでもなく、遅くとも二十三年始めのまだ冬のころには、投稿すべき歌はずで揃っていたのではないかと思う。

○年次(三)——季節について

『未定稿1』の歌にみえる季節には偏りがある。明確に春を表す語や句がないということである。問題は次の二首である。

〈21〉かけ淡き谷の底ひに住みつきて苦患はときに水に流しつ

〈6〉はらぎてにはかに散らふうす色のはなびらなども夢に見えつ

も

〈21〉の初句には、春のまだ淡い光が感じられる。しかし、「かけ」はものの形象、ともとれる。もちろん、ものの形象は光と光がさえぎられてできる影とむすびつき重なりあうから、この歌は春の淡いひざしのつくる影を見て作つたのではない、とは言い切れないが、淡い影は春とはかぎらない。秋や冬の光と影も夏にくらべれば淡い、などというまでもなく、「谷の底ひ」のかけはいつも淡いのではないかと思う。

〈36〉の、はらはらとにわかには散る花びらは、夏の花、秋の花はあつても、春の花にもつともふさわしい。もし花の名を特定するなら桜であろう。「うす色」は紫色や藍色の薄いものをいう、と辞書にはあるが、淡い色、薄い色ともとれる。薄い紫色・藍色、淡い色・薄い色のどちらであっても、

春の淡い光、ことに夕光の中を散る桜の花びらが「うす色」に見えることはありそうに思える。しかし、そうであるとしても、これは夢の景である。「はららぎてにはかに散らふ花びら」の夢は、春夏秋冬いつ見てもそれぞれの趣があるう。桜の花びらの散る夢、春に見る夢と限定すべきではない。この二首をのぞくと、『未定稿1』に多少なりとも春を表す語・句をふくむ歌はない。夏もわずかであり、秋がもつとも多く、冬がそれにつぐ。このように歌にみえる季節を基準にしてわけると、『未定稿1』は四つの歌群にわかれる。そして、それに先に推定した『圓坐』、『オレンヂ』、『新聲』、『花軸』の四つの歌誌への投稿時期を併せると、『未定稿1』の六十首は、次のような四つの歌群にわけることができる。四つの歌群をここでは仮にA群、B群、C群、D群とする。

A群 〈1〉 〈3〉

* 〈1〉・〈2〉・〈3〉が『圓坐』第二巻第八号に掲載

○季節の明瞭な語句はない。ただし、先に記したように、『圓坐』「淪落」には『未定稿1』に収められている右の三首の前に二首が置かれている。その二首目、

街路樹に照る夕陽かげ妻ならぬ女体をおもふあはれしきりに
の初二句は、落葉していない街路樹に弱くはない夕陽が照りつけているように感じられる。もしそうであるなら、夏か、遅くとも残暑の頃の歌である。また、『未定稿1』の〈3〉、『圓坐』「淪落」では〈5〉の、

きよ若くをとめはあれよ霧の夜の淫婦にとひて道を折れゆき
ぬ

の「霧の夜」は秋を思わせる景物である。『圓坐』の「淪落」五首は昭和二十二年夏から秋にかけて作った歌であり、『未定稿1』に収められている三首もそのころの作である可能性がある。それでは『圓坐』への投稿時期が遅くとも七月中旬という推定との間に齟齬をきたすが、その投稿時期は、一司が会員なり同人なりの一人として普通に投稿していたのなら、という限定付きの推定によるものであることは「年次(二)」に記した。

○『圓坐』第二巻第八号への投稿年次は未詳。

B群 〈4〉 〈15〉または〈16〉

* 〈5〉・〈6〉・〈7〉・〈9〉・〈14〉が『オレンヂ』第二

巻第六号に掲載

○季節を表す語・句をふくむ歌

〈8〉秋きよき梢にいくどかけのぼりふれど破れし旗はそよがぬ (秋)

〈11〉秋ふけてこころ渴けば鱗々と杳じきわだちの音もきこゆる (秋)

〈15〉冬やまの崖のましたに凍てて立つ石あり神のごとくかなしも (冬)

○秋の歌にはじまり冬の歌で終わる。右には掲げていないこの歌群一首目、五首目の、

〈4〉持まるる方向もあれやとひたすらに夜霧は頬に受けて駆りぬ

〈9〉霧のふる夜燈があはしちかよりて照しいださむさひはひもな

く
も、「夜霧」、「霧」のみで秋とするのはためられるが、この位置にあることにより秋の歌と推測される。「〈15〉または〈16〉」としたのは、

〈16〉生ける樹にさびたる釘をうちこめば想ひほつれてうるほふし
ばし

が季節不明であり、このB群か次のC群のどちらに属するか決められないからである。

○『オレンヂ』第二巻六号への投稿は、昭和二十二年十月頃から二十三年五月上旬頃。

C群 〈16〉または〈17〉 〈49〉

* 〈19〉・〈28〉・〈30〉・〈34〉・〈41〉が『新聲』に掲載

○季節を表す語・句をふくむ歌

〈17〉やぶかげにじめじめ伸びる毒茸の赤きをなぜに見ねばならぬ (秋)

〈19〉曼珠沙華ゆめとさくあのうみぞひの段々畠をこえて帰りぬ (秋)

〈27〉曼珠沙華ひそみ咲く野に墜つる陽よ終末の日の今日にあらぬや

〔32〕 べにの雲とほべにいぬる秋の野に日もすがらなりし疑ひも消え
 (秋)

〔33〕 秋風は涼しくふかく身をめぐらうちらに耐ゆるものいまはなし
 (秋)

〔37〕 いたくしづけく季節はみ冬へ傾けり風鳴り止みて梢のくらき
 (秋)

〔38〕 陽のあたるみじかきいまを地に描きあそべる子らのその深きか
 げ
 (秋)

〔39〕 たどきなくゆふべはけむるまなかひに昏れてのこれるましろ山
 茶花
 (秋)

〔40〕 しらけたる終りならぬをうつつな秋雨にぶくふりてやまらずも
 (秋)

〔44〕 眠るまも屋根に降り積む雪ありと信ずるは今日の小さきしあわ
 せ
 (冬)

〔45〕 音もなく天よりくだる白霜を思ひめぐらしながら眠りぬ
 (冬)

〔49〕 山茶花はしきり散るなり夕雲は紅くにちみて移りゆくなり
 (冬)

○秋の歌にはじまり冬の歌で終わる。
 〔22〕 風こぼる谷に朽ちゆく悔しみのまたも叫びにならむとはす
 る

の「風こぼる」は一見すると冬であるが、「風こぼる谷」は風も凍
 ってしまいそうなあまり陽のあたらない深い谷をいつている、と解
 釈すれば、冬に限定できない。むしろ限定しないほうがいい。

○『新聲』への投稿は、昭和二十二年十一月下旬から十二月下旬頃か。

D群 〔50〕 〔60〕

* 〔51〕 が『花軸』第七集に掲載
 ○季節を表す語・句をふくむ歌

〔50〕 ほとぼしる水の飛沫を浴びながらしりへにつきておどり込みつ
 も
 (夏)

〔52〕 うら枯のおどろが中に駈け入りしすばやさよ縞となりて残れり
 (夏)

〔55〕 家裏の溝にさやけくどくだみの咲けるを見つつ吾がいとしも
 (秋)

〔58〕 とほじろく雪降るなればみづからのふかきかこひのうちに眠れ
 り
 (冬)

〔59〕 冬白き石のかたへは穴ごもる蛇も哀しと覚めて思ふらむ
 (冬)

○夏の歌から始まり、秋の歌につづき、冬の歌で終わる。

〔55〕 「どくだみ」は、俳句では夏の季語であり、『岩波現代短歌
 表現辞典』（岡井隆監修・三枝昂之ほか編 一九九九年一月）岩
 波書店）の「どくだみ」の項（藤井常世）にも、「白い十字に見え
 るのは四弁の総苞で、初夏、真中に黄の小花を穂状につける」とあ
 るが、秋まで咲きつづけることもある。この『未定稿1』に挟み込
 まれている【1】の（3）『未定稿1』挟み込み紙1の（14）に、

どくだみの花そればかり咲き おどろくほどの秋のふかさや
 という歌案がある。「咲き」で改行されているので、「どくだみの」
 と「おどろくほどの」とは別個の歌案である可能性もあるが、配列
 にしたがいが秋とすることもできる。

○『花軸』第七集への投稿は、昭和二十三年一月十五日頃から一月末
 頃の間。

一司の短歌に、作歌時の季節はどのように関係しているのかよくわから
 ないが、歌における「春」・「夏」・「秋」・「冬」の語およびその景物
 と日常におけるそれらとは、意外なほど結びついていっているように思われる。
 もちろん古典和歌と同日に論じてはならないであろう。丹比や鳥取の季節、
 風土を考慮に入れようとすると、春夏秋冬の境目をどこにおけばよいのか
 も、曖昧である。しかし、『未定稿1』の歌に、「秋」、「冬」という語
 と秋・冬の景物はかなり多く見られるのに対して、「夏」の語はなく、夏
 の景物も「ほとぼしる水の飛沫を浴びながらしりへに從きておどり込みつ
 も」の一例、「どくだみ」を夏とするなら二例である。そして、明らかに
 春であることを示す語・句、景物は見られない。また、B、C、Dの三つ
 の歌群はそれぞれの内部において、「風こぼる」、「どくだみの花」のよ
 うな問題はあるけれど、ほぼ季節のめぐりにしたがって、言い換えると作

歌の早い順にならんでいると思われる。歌誌への推定投稿年次による分類と季節のめぐりによる分類がほぼ合致しているとしたら、これは偶然では片付けられないであろう。

そこで、歌にみえる季節にもとづいて推定した『未定稿1』収録歌の作歌時期と、先に掲げた四誌への投稿時期とをあわせてまとめると次のようになる。

A群

作歌：昭和二十二年夏・初秋頃か。

投稿：未詳

B群

作歌：昭和二十二年秋から冬

投稿：昭和二十二年十月頃から二十三年五月上旬頃までの間

C群

作歌：昭和二十二年秋から冬

投稿：昭和二十二年十一月下旬から十二月下旬頃

D群

作歌：(5)は昭和二十二年九月から十月頃。その他は昭和二十二年夏から昭和二十三年一月頃までの間

投稿：昭和二十三年一月十五日頃から一月末頃までの間。

そして『未定稿1』の成立は、

昭和二十三年一月始め頃から同月末頃までの間

と考えられる。

以上、『未定稿1』収録歌の作歌年次と『未定稿1』の成立年次についての報告である。明らかにできないまま残った問題は数多い。D群の『花軸』掲載歌十五首のうち十四首が『未定稿1』にない理由はかろうじて「年次(二)」に述べたが、解決できないままの問題は、まさしく枚挙するに暇がない。『圓坐』掲載の五首のうち、「獸肉を」、「街路樹に」が『未定稿1』のA群にないのなぜか。B群の『オレンヂ』掲載歌以外の七首または八首、C群の『新聲』掲載歌以外の二十九首または三十首、D群の『花軸』掲載歌以外の十首は、なぜ『未定稿1』のそれぞれの歌群のそれぞれの位置に書きつけられたか。刊行された歌誌に掲載されている歌の前後の

順が、歌誌と『未定稿1』とで異なっているのはなぜか。また、『未定稿1』の何も書かれていない一枚目、二枚目の原稿用紙、もし短歌なら十二首分には何が書かれるはずであったのか等々、なんら解決できていない。『未定稿1』は自選歌集なのか、そうではなく歌控えのようなものなのかも実のところまだわからない。だから、今後、あらたな一司関連資料の発見により、この報告は無意味になるかもしれないと思う。

○結び

結びとして、塚本書簡に言及されている二首について記しておきたい。改めて引用するなら、昭和二十三年七月六日付の書簡【24】に、一司との対面後の「充実感」と「虚脱感」とを述べ、つづけて次のように言う。

「鳥も啼かうとせぬ夕ぐれの風景の中に死といふものが鮮かな像となつて顯つてくる」

「廻轉ドアをくるりと押して出たとき重苦しく垂れ下つてゐる雲を見た」といふ風な意味の貴兄の作品を思ひ出します。

この作品が、『未定稿1』にある、

(18) あざやけき死のちらちらとうかびくる日ぐれは禽も啼くとせな

(48) 押せば開くとびらくぐりて出でしときひくくたれたる雲をみるとめぬ

であることは間違いない。

これら二首は、現時点では、「あざやけき」は『未定稿1』のほかには『短歌』『初等文法』、『大系』十一巻「あくびする花」にしかみえないし、「押せば開く」は『短歌流域』第六号にもみえるが、これより後の昭和二十四年のことであり、塚本自身の紹介によるところである。昭和二十三年七月六日以前に、塚本がこれらをいつ、どこで見たのかわからない。

昭和二十三年七月の対面の時、一司は『未定稿1』を持参したというのは、あり得ないことではない。「陶酔の韻律」に精神を傾けつくして歌が作れない状態に陥った一司が、自選歌集を作ることによりよみがえった、その自選歌集を塚本とともに見て……など想像するのは楽しい。しかし、六十首のうち記憶にとどまっている歌を、一首全体にしても一部分にしても引用ではなく「というふうな意味」の歌と言ひ、しかも「思ひ出します」

とは、直前に見た歌について言う言い方とは思えない。この書簡にも、また同日付けの一司の書簡【2】にも、『未定稿1』を持参したらしいことはまったく見えない。少なくともこの時にはまだ見ていないと思われる。

留意しておかねばならないのは、五月十三日の連絡会で杉田氏に指摘されたのであるが、短歌は刊行物や『未定稿1』のような未刊行の冊子だけではなく、歌会を通じて人に知られることもあるということである。たしかにそのとおりだと思う。一司の、

木製の片手に蝶のとまり来ていつか動けぬ追ひやりもせぬ

という歌は、現時点では塚本宛書簡【3】（昭和二十三年七月二十八日）のほか、『短歌流域』ほかの塚本の一司短歌紹介にしかみえないが、一司の書簡【6】（昭和二十三年十月三十一日）に、

この前の歌会で「木せいこの片手に」の歌でしたら生島さんだけほめてくれた。（友情で↓デセウ）訳がわからんといふのが多数。作者は手のない人で・・・云々といふのがあった ケツサク。

もう一つ、留意しておかねばならないのは、現時点では『未定稿1』が塚本のかかわった文献以外にはみえない歌の掲載されている文献が、今後見つかる可能性は大いにある、ということである。その候補を一首あげると、

〈40〉しのびかにしたがふ日々よきよらけく雲を超えゆく雲がしも

である。この歌がみえるのは、『未定稿1』のほかは『日本短歌』『天折歌人作品集』、『短歌』『初等文法』、『大系』『あくびする花』のみであるが、「天折歌人作品集」は、歌の下に○でくくって題を掲げており、この歌には、（終末の唄）とある。『未定稿1』にはどの歌にも題はないから、これは「しのびかに」が「終末の唄」という題のもとに掲載されている文献があることを示唆する事実と見てよいであろう。

が、しかし、いっぽうで次のような事実もある。

〈38〉秋ふけて 『未定稿1』 〈11〉

〈9〉冬やまの 『未定稿1』 〈15〉

〈03〉しのびかに 『未定稿1』 〈20〉

〈41〉かげ淡き 『未定稿1』 〈21〉

〈42〉樹々に鳴る 『未定稿1』 〈60〉

「天折歌人作品集」四十八首のなかに、塚本関係文献と『未定稿1』にし

かない歌が「しのびかに」をふくめて右のように五首あり、下に示したとおり配列の前後関係が『未定稿1』と一致している。しかも、その五首が「天折歌人作品集」においては〈38〉から〈42〉まで五首連続している。まずは『未定稿1』からとったと考えたいところである。

塚本が、今は杉原家に落ち着いている『未定稿1』を手許に置いていた時期があったことは、『残花遺珠』の「杉原一司」（前出）に、次のようにあることから明らかである。

私の手許には今、既に引用の個処を含む断簡の他に、令子夫人から預つた手帖・備忘録・歌篇ノート等が数十種、目方にして約三疋保存してある。

しかし、右の「今」とは、この少し後に、「一九九二年三月二十五日、この稿の準備中に」云々とあることからだいたい見当がつく。一九五〇年五月二十一日一司没、その四十二年の後である。塚本がはじめて「あざやけき」、「押せば開く」の二首を、そして『未定稿1』を見たのはいつなのか、またどのような経緯でなのか、今はまだわからない。